

The Japan Times

Tuesday, February 1, 2000

東京でスイングダンス再燃！

1996年のヒット映画「Shall We Dance?(シャル・ウィ・ダンス?)」は、日本人に社交ダンスの魅力を広めた。しかし、国内のダンススクール開設ラッシュにもかかわらず、社交ダンスは一部のナイトライフのマイナーな役割を続けている。今、一部の愛好者達は、ペアダンスのカジュアルバージョンとも言えるスイングダンスを流行らせつつある。そのアメリカでの人気の再燃が太平洋を超えてゆっくりにやって来ているのだ。

競技社交ダンスでは10年の経歴がある山田浩之さんは、1999年12月のワシントンDCのあるパーティで、そのダンスのダイナミックな回転運動の前に立ちつくしてしまった。山田さんは、すぐにその見られないダンスのビデオを探した。それはリンディ・ホップと呼ばれるスイングダンスの源ともいえるダンスだった。

山田さんはジャズに乗ったそのダンスにすっかり魅了された。3ヶ月後、彼はさまざまなダンス経歴のある他の日本人インストラクターと共に東京スイング・ダンス・ソサエティ(TSDS)を設立した。それ以来、用賀にある公民館での毎週のレッスンや、数々のイベント、そしてアメリカからトップインストラクターを招いたワークショップなどを開いてきた。

小知和有さんは、それまで一度もダンスのレッスンは受けたことがなかったが、1999年、テネシー州のチャタヌーアで、クリスマス・スイング・ナイトに招待された。そこで、小知和さんはひとりの素敵な女性と出会い、彼女は自らダンスパートナーになってくれた。

「もっとうまく踊れたらいいのになあと、あの時はしみじみ思いました。」と小知和さんは当時を振り返る。その二週間の旅行から帰るやいなや、小知和さんはスイングダンスの情報を探し、そして、TSDSのホームページを見つけた。現在、彼は山田さんがはじめたダンスクラスのレギュラーメンバーだ。

リチャード・モローさんはリンディ・ホップをサンフランシスコで学び、現在、六本木のクラブ、ヴィエッテで自分のクラスを教えている。モローさんは、スイングは異性とのコミュニケーションをとるいい方法だと言う。そしてそれは新しい課題でもある。モローさんの最も大きな挑戦は、彼いわく、日本人の生徒が恥ずかし



パートナーとスイング 六本木の Sweet Basil 139でグランド・モード・スイング・バンドの演奏ののってスイングする佐々木哲男さんと村田美由貴さん。写真：斉藤真由美

がりやであることだ。

「僕は二人をできるけ近づけるんだ。」と彼は言う。「誰かにダンスをお願いする時は、恥ずかしがってるわけにはいかないよ。」TSDSのインストラクター、小林律子さんは、そんなどこにでもあふれる雰囲気について認めている。「日本人は、ダンスに対しておじけづいてしまう傾向があります。私は、もっと多くの男性がしっかりと女性をリードしてくれれば、と思います。」

しかし、その恥ずかしさはすぐに吹っ飛んでしまうようだ。佐々木哲男さんは、時々、ズートスーツとハットに身を包み、TSDSのイベントにあちらこちらと出かけてすっかり楽しんでいる。「スイングにハマっている人達といっしょにいるのは楽しいです。」と彼は言う。ダンスクラスの仲間達もたぶん同じ気持ちだろう。多くのダンスクラスは女性が多い傾向があるのに対して、TSDSのレッスンは不思議と男女の割合をほぼ同じに保っている。

リンディ・ホップは1920年代後半から40年代半ばまで、ニューヨークのハーレムにあるサボイ・ボールルームで大流行した。風変わりなステップとアクロバティックなエアリアルの動きに代表されるリンディ・ホップは、チャールズ・リンドバーグにその名前を由来する。ダンス歴史家のクリスチャン・パチェラー氏によると、リンドバーグが1927年に大西洋を「ホップ」し、大西洋単独飛行に成功したことにちなんだものだそうだ。その後、リンディはジルバやブギウギへと多様化し、50年代や60年代のロカビリーやロックンロール

スイングは1984年まで、ほと

んど忘れ去られていた。その年、エリン・スティーブンスとステープン・ミッチェルのダンスパートナー達によって、サボイの伝説的人物であるフランキー・マニング氏が再発見されたのだ。GQマガジンにエリザベス・ギルバートが記したところによると、その時彼らはマニング氏にダンスを教えてくれと頼んだという。マニング氏はリンディを再燃させ、今や世界中をリンディで旅している。

ネオ・スイングのバンドがヒットするにつれ、レトロなダンスはその時代のヴィンテージファッションとともに90年代に蘇った。「マルコムX」「スウィング・キッズ」「リーグ・オブ・ゼア・オウン」「マスク」そして「スウィングーズ」など数々の映画がスウィングのシーンで有名になった。そして1998年はリンディブームになり、GAPのコマーシャルではカーキ色のダンサーが踊り、MTV大賞にはブライアン・セツァー・オーケストラが放映された。昨年は人気テレビ番組「アレー・マクビール」やウィル・スミスのミュージックビデオ「Will 2K」がそのダンスを披露した。

日本が最初にスウィングと出会ったのは、第二次世界大戦のあとの占領軍といっしょだった。さまざまなスウィングダンスが紹介されていく中で、日本語でジルバと呼ばれる jitterbugは、その6カウントのステップがリンディの8カウントより比較的やさしいと思われた。ジルバはその他のダンスが流行る前に国内に広まった、とダンス歴史家、乗越たかおは書いている。

今、東京のスウィング再燃は一刻一刻と進んでいる。TSDSは、グランドマスターであるフランキー

・マニング氏が8歳になる5月の誕生日イベントを名誉あるホストとして迎えることになった。

ニューヨークで教えパフォーマンも披露するTSDSの客員インストラクター、チャド・ファスカさんは、日本人の生徒はビッグ・アップルを真似するよりダンスそのものに対して情熱的であるようだと言断する。「僕はただ、東京にダンスが踊れるクラブがもっと必要だけだよ。踊れる場所が十分あるとはいえないんだ。」という。

事実、TSDSのインストラクター小林秀行さんは、ファスカさんの地元をうらやましく思っている。そこには「毎晩踊ることのできるに十分なクラブ」があるからだ。東京では、特別なイベント以外、定期的にダンスを許可してくれるクラブは存在しない。「週に一回または二回が限度です。」と小林さんは嘆く。「それもその機会は平日なので、多くの人にとって出かけていくのは難しいのです。」

スウィングのイベントをうまく作り出すことは、山田さんやモローさんにとって常に悩みの種だ。多くのジャズクラブにはダンスフロアがないし、バンドの中には聴衆が座っているのを好むバンドもある。だが、モローさんは、もっと多くのイベントが週末にあればもっと立場がよくなる、と考えている。

ファスカさんは、「バンドがダンサーを敬い、ダンサーがバンドを敬う限り」東京人のジャズ音楽好きやクラブ好きは結果的にそのダンスシーンを育てることになるだろう、と確信する。彼いわく、音楽は彼自身のダンスへの原動力だったからだ。

スウィングは永遠の炎だと、ファスカさんは信じている。それは大都市で最も明るく燃えるのだと

東京も含めて。「スウィングは絶対になくならないと僕が確信しているひとつの理由は、僕は今まで人が『やってみただけど、面白くなかった。』なんて言うのを聞いたことがないからさ。」

東京のスウィングシーンについての情報は、TSDSのホームページをみるか、モローさんまでEメールしてください。
・TSDSホームページ: www.impetus.ne.jp
・モローさんEメール: rich@rivid.com

斉藤真由美 記者